

文語の苑

メールマガジン第一号

文語の苑メールマガジンの発刊にあたって

文語の苑は平成十五年発足以来文語創作発表のための専門のウェブサイトを始めとして各種の事業を進め着実に発展してきましたが、この度会員相互の交流を一層深めるためメルマガを発刊することとなりました。現在文語の苑は文語教室を中心とする草の根運動を進めようとしています。これらの文語教室間のネットワークを作り上げる上でもメルマガの役割には大きなものがあります。当初は手探りで進めていくこととなりますが、いずれ文語復興運動の有力な手段に育つことを期待して居ります。

力強く気品のある文語は四大文章語の一つであり、我が国が世界に誇る資産であります。これが核にあつてこそ日本語は世界一流の言語たり得るのです。また我が国のコミュニケーションの質を保証するいわば基準点であるとも言えます。これを後世に伝え日本の言語伝統を守って行くことは、国を愛する知識人の責務であり、かつ、誇りであります。会員の皆様方にも是非文語の魅力を周囲の方々の方に説いて頂きたく、そのための材料もこのメルマガの中に見出されることと信じています。

最後に皆様の今後の一層のご発展を祈念して発刊のご挨拶と致します。

平成二十三年六月

文語の苑 代表幹事 愛甲次郎

幹事

愛甲次郎、市川浩、加藤淳平、塩原経央、古家時雄、葉山せい子
松岡隆範、谷田貝常夫、岡崎久彦

タスクフォース

赤谷慶子、飯田祥一、石丸陽、児玉稔、土屋博、内藤賦一

文語の苑

メールマガジン第一号

小倉百人一首 ― 前書き その一

小倉百人一首は、藤原定家が自分の子の妻の父、関東の豪族の宇都宮頼綱の為に、西暦で言へ(え)ば千二百三十五年から何年か掛けて選んだものです。藤原定家は日本最高の歌人の一人ですから、皆さんも名前はご存じでせう(しょう)。この名前は「フジワラノサダイエ」と読んで、「フジワラテイカ」と読んで、「ノ」を入れても入れなくても、又名前を音で読んで読んでも、どちらでも構ひ(い)ません。

時代は、鎌倉幕府が最も安定した執権北条泰時の時代です。関東武士の政権が已に百五十年近く続き、定家のや(よ)うな公家貴族から見れば腹立たしいことだったでせう(しょう)。然し貴族ではあっても、古典文化に通暁した定家は、関東の豪族と姻戚関係を結ぶくらいですから、時代の帰趨を正確に見通してゐ(い)たに相違ありません。

自分たち公家貴族が、脈々と伝承して来た古典文化の精髓を、新しい日本の実権者である関東の人たちに伝へ(え)たい。これが、小倉百人一首を編纂した定家の、気構へ(え)と情念だったと想像されます。小倉百人一首は、当時の貴族の文化を体現し、代表する人だった藤原定家の、日本の歴史と文化に対する学識と鍾愛の思ひ(い)を、凝縮したものであったと言へ(え)るでしょう。

小倉百人一首に選ばれた歌人と歌の並べ方には、定家の決めた厳密な順序があります。最初は天智天皇とその皇女の持統天皇、最後は後鳥羽院とその皇子の順徳院です。天智天皇の時代、日本は韓国の白村江で、唐と新羅の連合軍と戦って敗れ、強力な敵軍が攻めて来るかも知れない未曾有の国難に直面して、国の基礎を築いた。後鳥羽院と順徳院は、鎌倉幕府に抵抗し、配流の憂き目に遭ひ(い)しました。

その間、六百年の年月が経ちました。日本は唐に学んで国を建設し、やがてその栄えた唐が滅びて、唐の影響から脱した日本に独自の文化が開く。然し日本独自の絢爛たる王朝文化を築いた貴族たちに、もはや政治的実権はありません。鎌倉武士が京に攻め込んで来て、後鳥羽院が屈服した承久の変は、定家にとって痛恨の極みだったことだでせう(しょう)。小倉百人一首最後の順徳院の歌、「百敷や ふるき軒端のしのぶにも、なほあまりある昔なりけり」は、定家自身の感慨ではなかったでせう(しょう)か。

私は長く公務員として勤務した為、日本の敗戦後の「新仮名遣ひ(い)」に馴染んで参りましたが、国語の本来の性質から見れば、「旧仮名遣ひ(い)」の方がよいと考へ(え)ますので、本稿では、基本的に「旧仮名遣ひ(い)」を使ひ(い)、括弧内に「新仮名遣ひ(い)」を書いて置きます。

加藤淳平

文語の苑

メールマガジン第一号

文語歌曲「故郷・ふるさと」(文部省唱歌) その一

前書：これから「文語歌曲」といふ題で、日本の歌の歌詞をとりあげます。瀧廉太郎作曲の「荒城の月」は文部省編纂の「中学唱歌」に採り入れられながら、「日本歌曲」と呼ばれることもあり、「雪やこんこ」は日本で最も古い童謡とされながら、「幼稚園唱歌」におさめられてゐる。このやうに「唱歌」とか「童謡」、「わらべうた」、「歌曲」はかなり混同して用ゐられてゐることを最初にお断りしておきます。

歌詞が「文語」なので、極力「文法」面もとりあげるつもりです。ナンセンスな歌であっても、文の意味ははつきりしてゐるからです。

「故郷 高野辰之作詞」

明治時代になつてから作られた歌曲で、時代を越えて歌ひつがれてきたものの代表はなんといつても「故郷」でせう。中南米に住んだ日系人一世はことさらにこの歌に涙を流すと聞いたことがあります、我々の「文語の苑」のホウムページにも和田裕さんの書いた卓抜した文章が載つてゐますので、お尋ねくださると幸いです。心ならずも戦後ロシアに居残ることになつた日本人老夫婦が、ラジオでこの「故郷」を歌つたところなど、涙なしには読めません。

<http://www008.upp.so-net.ne.jp/bungsono/shisoro/wada005.htm>

日本人にとつて、この「ふるさと・古里、故郷」といふことばは、よく使はれながらも、貴重な語彙になつてゐます。ここが「古里」だと決めこんだ思ひから、放射能が降らうが槍が降らうが立ち退きはしないと云ひきる老人もゐるくらゐです。すでに千三百年も前の『萬葉集』でも、昔は榮えてゐたが今は荒れてゐる都などの意味で「ふるさと」が使はれてゐます。古今集になると元住んでゐた所、なじみの土地の意味でさかんに使はれます。観音信仰で知られた大和の長谷寺に行くと、梅の木の間ひに「紀貫之古里の梅」といふ石碑がたつてゐて、「人はいさ心も知らず古里は花ぞ昔の香に匂ひける」が作られた地であることが知れます。俳句でも、芭蕉は生地伊賀に帰つた折に「古里や臍(へそ)の緒に泣としくれ」と詠んで、古里で己れの原点に会ひ涙を流してゐます。

石川啄木は終着駅上野で「ふるさと」の訛なつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きにゆく」と詠みました。いはゆる古里を慕ふ「望郷・懐郷・思郷」の念から作られたものといへませう。そして萩原朔太郎は與謝蕪村を「郷愁の詩人」と讃へました。「遅き日のつもりて遠き昔かな」といつた句を挙げて、「時間の遠い彼岸に實在してゐる、彼の魂の故郷に對する『郷愁』であり、昔々しきりに思ふ、子守唄の哀切な思慕であつた」と敷衍します。

都会人の多くなつた現在では、特定するやうな故郷を持たない人がほとんどでせうが、次に示す歌詞そのものが、日本人の誰も心のの中に實在してゐる「故郷」なのだと言ひきることができ、だからこそ、日本人に唄ひつがれてきたのだと言へます。

谷田貝常夫